

孤族の国に生きられますか

一遍の詩を紹介しよう。

行き摺りの今日だけ（森田省子）

どんな風に死んだかを語るのはつらいことではありません。ワタシ がこわがっていたのは迷子になることでした

迷子になって飢えることでした 迷子になって凍えることでした 立ち別れになることでした。

だから どんな風に死んだかを語ることはつらいことではありません。

とても無事に それは無事に 死にました。

あとは めでたい内緒です。

私は、この詩を読んだとき、胸にひりひりと迫るものがありました。この詩は、今から7年前、あさひかわ新聞という地方紙の新年特集号に掲載されたものです。

昨年は、多くの高齢者が行方不明となっているという事が大きな社会問題となりました。核家族化が進む、人と人との関わりが希薄になっているという中で社会から孤立して生きている人が増えている。今や、孤独死という言葉聞いてもさして驚かない、まさに孤族の国に生きているのだということを実感せざるを得ません。

昨年の12月から今年の1月にかけて朝日新聞が「孤族の国」という特集を組みました。

また、NHKは「無縁社会」というテーマで特集番組を制作しました。双方に共通しているのは、人と人との関係がバラバラになって、家族でさえ繋がりを持たない、そうした渺々たる世界が広がりつつあるということだと思います。

私達は、これまで、人は誰しも一人では生きていけない存在である、と教えられてきました。にもかかわらず、経済大国といわれ、先進国といわれている我が国において、誰にも看取られず、一人で孤独の中に死んでいく。このようなことが日常茶飯である事に危機感を感じますし、このままで良いはずがありません。

私は、時代がどのように進もうとも、人は人と人との関わりの中で生きているものだし、その事を強く求めているとも思っています。

森田省子さんの詩は、その事を改めて呼び起こさせるものでしたし、新年特集号という華やかな紙面に彼女の詩を掲載した、あさひかわ新聞編集者の慧眼に敬服しています。（塾頭 吉田 洋一）